Tea Room（ティールーム）

日吉図書館の貴重書展

徳永（とくなが）　聡子（さとこ）
（文学部准教授）

慶應義塾図書館が所蔵する東西の稀覯書は，その大半が三田キャンパスで大切に保管されているが，実は日吉メディアセンターにも貴重書室が存在することをご存知だろうか。教員・大学院生専用のフロアにあるため，学部生の入室は許されない。日吉キャンパスに通う学生にとっては，高校の教科書で習った“昔”の本がひしめくように並ぶ。この小部屋の存在を学部生たちに教えると，目を輝かせる若者が必ずいる。壁の向こうにはどんな本があるんだろう？ ―まるで秘密の花園を想像するワクワク感。“貴重書”という言葉には，未知の世界への想像力や好奇心をかきたてる不思議な力があるのだ。

こうした貴重書の魅力を教育の現場で活用する方法が，学生との協働で作り上げる図書展示である。日吉図書館の１階と２階の展示コーナーでは，四季折々に展示が行われている。2019年度の秋学期，筆者も久しぶりに文学部設置の総合教育セミナーIIと連動させた貴重書展を行った。企画の段階から実現に至るまで，日吉メディアセンターの関係者より温かいご理解と多方面にわたるサポートをいただいたことに，あらためて御礼申し上げたい。

筆者の専門は西洋書誌学・書物史であるため，最初に洋書古書の扱い方（事前の手洗い必須！），開き方（無理やりではなく，本に開いてもらう），貴重書の閲覧時に使う書見台やスネイク（重石）のこと，本の造りなど，基礎的な学びを伝える。古版本や私家版，20世紀の初版本などの原本に触れると，受講者たちから次々と感嘆の声があがる。また，４階フロアへの入室も特別に許可いただき，東西閲覧室の書棚もブラウジングした。宝探しのようにフロアを巡って，興味深い本を次々と発掘する学生たち。いまや本も論文も辞書もデジタル・データで簡便に入手できるようになったが，身体性が欠如した情報収集にはどこか限界もあるように感じる。図書館や古書店の書棚のブラウジングの重要性が再認識されるべき時期のようにあらためて思う。

貴重書の閲覧や図書館探索の後，学生たちは企画会議に取りかかった。２つの班に分かれて，展示のテーマをどうするのか，何を伝えたいのか，どのようなストーリー性をもたせるのか，集客のためのアピール方法，選書と展示の順番等々，さまざまに意見が飛び交う。展示のテーマと資料が決まると，今度は本の解題準備で，一人一人が自分の選んだ本とじっくりと向き合う時間である。そして解題をまとめ，校正をし，表紙／ポスター（本誌のカラー口絵「ポスターで見る2019年度の主なイベント」に掲出）を作って小冊子にまとめる。こうした下準備を経て，図書館スタッフのサポートのおかげもあって無事に展示初日を迎えることができた。

２部構成の展示の前半部では，「稀覯書と芸術」「稀覯書と昔話」など貴重書を軸にした展示を，後半は「人の一生と本」と題して，架空の人物の人生を彼が読んだ本と共に辿る形式をとった。すべて学生主導で，教員の出番は驚くほど少ない。今回の授業目的は，書物学の入り口を体感的に学習してもらうところにあったが，学生たちにとっては，自ら企画を立て，実現させていくそのプロセス自体が，経験的な学びとなったように思う。

ヨーロッパ中世写本学の権威であるクリストファー・ド・ハメル博士は，中世写本と向き合うことは，視覚のみならず，聴覚，触覚，嗅覚までもをフル活動させる営みだという。稀覯書は，羊皮紙や手漉きの紙の感触，ページをめくる時の音，装幀あるいは本自体がまとう匂いなど，楽しみ方もアプローチも重層的である。自身の感覚や感性を研ぎ澄ませながら，手にした書物が辿ってきた歴史を探っていくと，やがてそれは自己内省，自己発見にもつながる。新型コロナウイルス感染症拡大という未曾有の事態に直面し，社会のデジタル化はさらに加速化し，教育現場でもオンライン授業はあたり前の選択肢となっていくであろう。この新局面において，時空を超えて日吉に伝わる本と，学生たちと一緒にどのように向き合うことができるだろうか。本稿を執筆しながら，新たな可能性に想像をふくらませている。